

## 価値創造型への転換

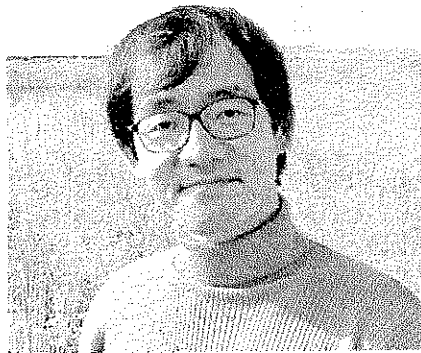
「ネットワークを広げるために必要な思想や理念は？」とよく問われることがある。そのときに私は「ネットワークに必要なのは、思想や理念よりも物です」と答えることにしている。具体的な物に新たな価値や意味を創造すると同時に、付加価値の連鎖を社会に生み出していくことで、ネットワークは広がっていくのである。

環境問題が日々深刻さを増していることは事実だが、同時にそれは既存の枠組みを超えた人や物や金の動きを社会に生み出していく好機でもある。地域の環境問題から地球環境問題まで、ネットワークで展開する技術やシステムが求められているからである。しかし、企業は環境経営の多くは環境対策や環境負荷削減といった企業の枠の中の部分最適を求め続けている。

環境の世紀に、企業人には未来の社会を俯瞰したもっと大きなビジネ

## 企業人よ、環境の世紀に大志を抱け

i's eye



NPO法人アサザ基金代表理事

飯島 博

《いいじま ひろし》

1956年長野県生まれ。国内第2の湖、霞ヶ浦の環境再生を目標に、独自のアイデアでさまざまなビジネスモデルを提案、流域の170をこえる小学校などの教育機関や企業、行政、農林水産業を結ぶネットワーク事業を展開している。市民型公共事業「アサザプロジェクト」には延べ13万人以上の市民が参加。先進的取り組みとして注目されている。

展開を模索してもらいたい。それは、既存の枠組みの中での可能性の追求から、ネットワークによって社会の潜在性を浮上させるビジネスへの転換である。ネットワーク型社会は、地域コミュニティーや人々の日常が有するさまざまな機能と協働す

る技術やシステムを必要とする。つまり、企業という枠の中で開発した技術を社会でどう使えるようにするかという発想ではなく、社会が有する潜在的な機能を浮上させ、それらと協働する技術を創り上げていくという発想が求められる。

環境問題の深刻化が予測される中で、企業も行政も従来の問題解決型の取り組みから発展することがなければ、環境問題への対応はますます規制や制限に依存するものへと傾き、社会は停滞し、活力が失われていくに違いない。企業は環境への取

## 縦割り溶かすネットワーク

り組みも、多くは規制や制限といったシステムへの受け身の対応であり、新たな社会システムの展開へと向かっていない。企業人は未来を展望し、真の創造性を発揮すべき時期に来たのではないか。

今求められているのは、問題解決型から価値創造型への転換である。環境をキーワードに、既存の枠組みを超えて多様な分野が出合う場を創出することで、価値の創造が起きる。しかし、「既存の枠組みを超え」といっても、社会や組織には分厚い縦割りの壁がある。そこで、よく縦割りを「壊す」という言葉を聞くが、私は社会や組織の縦割りは基本的には必要であり続けると考えている。

だから、私は「壊す」とは言わず「溶かす」と言っている。ネットワークによって縦割りの壁を溶かし、膜に変えるのだ。生命は膜によって自己と外界を仕切ると同時に開放している。膜を通して代謝を行い生命を維持している。

NPO(民間非営利団体)も壁を溶かすことができる。NPOは社会を自由に動き回り、異なる分野同士を結び付け新たな機能や価値を引き出すことができる。いわば、社会の触媒やホルモンとして働くのだ。それは、行政の機能を補完する下請け化したNPOにはできない。

## エコ・ジャポニズム

日本には欧米とは異なる自然観がある。地域コミュニティーと一体となった豊かな里山の自然と文化という様式である。自然と人間を分けて考える欧米からは仕組みや制度は出ても、おそらく価値を創造する様式は出てこないだろう。

日本は環境を軸に、地域コミュニティーの機能と協働する技術やシステム、ビジネスのイノベーションを起こすことができる。環境の世紀にあって、自然と人間の調和をめざす新たな様式「エコ・ジャポニズム」を世界に発信し浸透させていくべきだ。